

清流劇場
2021年10月公演

オレステス Orestes



ギリシア悲劇は、紀元前5世紀中期から後期にかけて隆盛を極めました。この間、ペロポネソス戦争と呼ばれるアテナイとスパルタを中心とした内戦(B.C.431～B.C.404)がありました。内戦初期には疫病の流行もあったようです。しかし、悲劇の上演活動は戦時下の憂鬱な市民を慰め、活力を与えてきました。ギリシア悲劇という《人々の暮らしの様々な様子》をシンプルに捉えた作品にふれることは、現代の私たちにとっても、大きな示唆を得られるもののように思います。

ギリシア悲劇は現在まで33篇が伝わっていますが、全てが《悲しい劇》ではありません。もともと

1シーン追加させていただきました。(※幕間休息後、冒頭のヘレネとエレクトラのシーンがそれです。)そして、この作品を演出するに際し、今日お越しのお客様にも、当時のギリシア人が悲劇を楽しんでいたような感覚でご覧いただこうと、暮らしに密着した《大阪ことば》でお届けすることにしました。これを機会にギリシア悲劇に親しみを感じてもらえるといいのですが。

今回の物語では、神様に「おかんを殺せ」と、そそのかされたオレステスが、思い切って《殺(や)ってもうた》ものの、その後「母殺し」の罪の意識にさいなまれます。なんだか物騒な話

神なき時代を共に生きる人へ

清流劇場 代表 田中孝弥

ADAPTATION & DIRECTION / TANAKA ATSUYA

tragoidia(古代ギリシア語/tragedy)の日本語訳に《悲劇》と当てたのが誤解の元で、本来は《ドラマチックな劇》といった程度の意味合いででした。それが、『オイディプス王』や『アンティゴネ』、『メディア』といった《ものすごく悲しい劇》があまりに有名になってしまったため、この訳語《悲劇》が定着しているようです。

さて、清流劇場が今年上演するギリシア悲劇はエウリピデスの『オレステス』です。この作品もドラマチックな劇ではありますが、特別悲しいことはありません。むしろ、おかしい。「ああ、こういうヘタレなおっちゃん居る居る」「こういうズッコイおばちゃんも居るよな」と、市井に暮らす人々が舞台に現れたようです。

この作品を元に丹下先生が補綴してくださったのが『弱虫オレステス』です。上演に際しては、ボクも構成・演出という立場で、僭越ながら、

にも聞こえますが、私たちの周りにもこんな人は居ませんか?

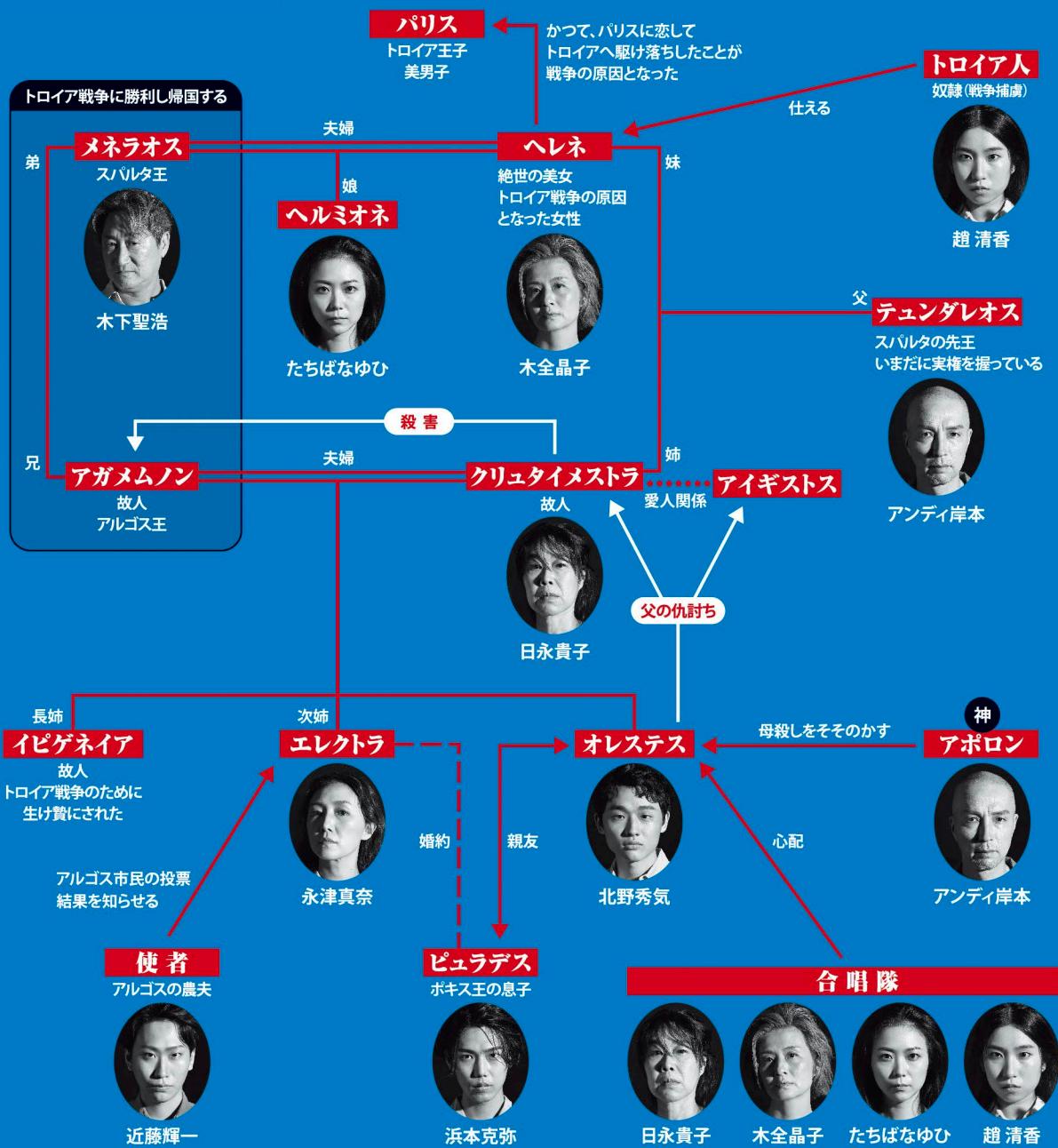
ある一つの考えに取り憑かれ、行動を起こした者が、思い描いていたような成果が得られず、挫折し、自暴自棄になる。ここに取り上げたオレステスという紀元前5世紀の人間も現代人もちつとも変わりません。

作者エウリピデスは劇の最後で、神様を登場させ、ヤケを起こしたオレステスを助けようとします。しかし、現代にそのような神は居ません。失敗し、壁にぶつかった私たちはこの世の荒波にどう対処すればいいのか。そんなことに思いを馳せられる作品をお届けできればと思います。

なかなか劇場へ足を運ぶことも憚られる中、本日はご来場いただき、誠にありがとうございます。ごゆっくりお楽しみくださいませ。

PERSON CORRELATION DIAGRAM 人物相関図

場所：アルゴス・アガメムノン王の館前



STORY ものがたり

物語の前段：アルゴスの王妃クリュタイメストラは、夫・アガメムノン王がトロイア戦争に出陣する際、長女のイビゲネイアを生け贋にしたことを怨んでいた。そして、王妃クリュタイメストラは愛人アイギストスと協力して、戦争を終えて帰国したばかりのアガメムノン王を殺害する。それから8年後、次女のエレクトラとその弟オレステスは、母クリュタイメストラを殺し、父の仇討ちに成功する。しかし、オレステスは仇討ちを遂げたものの、「母殺し」という新たな罪を背負う。

本編：劇の冒頭、オレステスは罪の意識にさいなまれて病に伏せっている。アルゴス市民の反応も冷たい。「母殺し」は市民から強い反発を受け、民会はオレステスに死刑判決を下す。こうして、オレステスは「罪の意識による身体の衰弱」と「死刑」という生命の危機に直面する。

オレステスは、生命の救済を叔父メネラオスに求めるが、スパルタの王位継承に目がくらんだメネラオスは彼を見捨てる。血縁関係も利害得失の前には力を持たない。絶望したオレステスは親友のピュラデスを頼る。二人は民会の場へ赴いて弁明を試みるが、失敗する。死を前にしたオレステスに、ピュラデスはヘレネ（＝メネラオスの妻）殺害を持ち掛ける。姉エレクトラはヘルミオネ（＝メネラオスとヘレネの娘）を人質にすることを勧める。オレステスはピュラデスと共にヘレネを急襲するが、すんでの所で逃げられてしまう。最終手段として、オレステスたちはヘルミオネを人質にして館に立て籠もり、「死刑判決の取り消しとアルゴス王位の継承」を要求する。メネラオスは市民たちを呼び集め、全面対決に臨もうとする。

ANDY KISHIMOTO



HAMAMOTO ATSUYA



KONDOU KICHI



HINAGA TAKAKO



KINOSHITA KIYOHIRO



KITANO HIDEKI



SEYU

PLAYWRITING/ EURIPIDES

TRANSLATION, ADAPTATION, & DRAMATURGY/ TANGE KAZUHIKO

ADAPTATION & DIRECTION/ TANAKA ATSUYA

弔 客 Orestes

CAST

ANDY KISHIMOTO

HINAGA TAKAKO

NAGATSU MANA

KIMATA AKIKO

HAMAMOTO KATSUYA

KINOSHITA KIYOHIRO

TACHIBANA YUI

CHO CHONGHYUNG

KONDOU KIICHI

KITANO HIDEKI

COMPOSITION & PIANO

SEMPA HIROFUMI

VIOLIN

TANIGAWA CHIHIRO

NAGATSU MANA

TACHIBANA YUI

SEMPA HIROFUMI

KIMATA AKIKO

CHO CHONGHYUNG

TANIGAWA CHIHIRO

SEIRYU THEATER

自分の土地財産が他人に力ずくで奪い取られたら、こちらも力に訴えて取り戻す——これは正義の行為として認知される、そういう時代がありました。法という概念が共同体を運営していくうえでの政治的・社会的な力となる以前のことです。この「力の正義」から「法の正義」へ移行する段階に居合わせて苦労した人間たちのことは、アイスキュロスもソポクレスもエウリピデスも取り上げて描いています。オレステスを取り巻く

に示唆したのです。しかしオレステスは母親殺害後、復讐の達成感よりもむしろ激しい罪の意識に襲われます。アイスキュロスは『オレスティア』3部作(前458年上演)で暗殺、復讐を描いたあと、最後に市民法廷の場を設定して親殺しの罪を法の力で解決しようとします。アイスキュロスはそう描いています。しかしこの解決法では、オレステスは世間的には無罪放免となって社会復帰は可能となつても、その心中の罪の意識

無頼派の旗挙げ

大阪市立大学名誉教授・古代ギリシア文学者 丹下和彦

TRANSLATION, ADAPTATION, & DRAMATURGY / TANGE KAZUHIKO

一族の話です。

オレステスというのはペロポネソス半島中東部の強国アルゴスの王子です。父はトロイア戦争でギリシア軍の総大将を務めたアガメムノン。母親は10年後にトロイアから凱旋したそのアガメムノンを愛人アイギストスと相図って殺害したクリュタイメストラ。姉はエレクトラ。オレステスはこの姉エレクトラと協力して母クリュタイメストラを殺し、父アガメムノンの仇討をしたのです。夫殺しに親殺し——血にまみれた一族の悲劇といえるでしょう。見方を換えれば、伝統的な復讐の大義と尊属殺人の罪の意識とのあいだで揺れる一人の若者の悲劇です。

そもそもオレステスの母親殺しはアポロン神の教唆によるものです。アポロン神は古い氏族社会特有の「力の正義」に則って父親の仇討をオレステス

は解消できないのではありますまい。

エウリピデスは50年後に同じ素材を用いてオレステスの悲劇を舞台に乗せます。『オレステス』(前408年上演)です。母親殺害後に問題化した生命の危機(市民による死刑判決)と魂の危機(母親殺害後のオレステスの罪の意識)、この二つの危機をいかに逃れるか、それが主要なテーマになります。そこでは母親殺害を教唆したアポロン神はその力で死刑判決は取り消してくれますが、オレステスを悩ます罪の意識までは解消してくれません。いずれ裁判で無罪放免になるだろうと予告するだけです。神とても人間の心中の悩みは解決できないのだ——オレステスはそう割り切って生きてゆかざるを得ません。

さて、本篇『弱虫オレステス』は、劇の末尾にクレーンに乗って登場し、劇の解決を図る神——デウス・エクス・マキナ

EURIPIDES PROFILE

作家紹介 (原作)

エウリピデス

紀元前480年(『エウリピデス伝』『スーター辞典』による)～紀元前406年

ギリシア三大悲劇詩人の一人。父親ムネサルコスと母親クレイトの間に生まれる。父親は貧しい行商人。母親は市場の野菜売り。アテナイ市もしくはその近くのサラミス島で生まれたとされる。はじめは格闘技の選手を目指すが、のちに精神的世界へ関心を示し、プロタゴラスに修辞学を、ソクラテスに倫理学と哲学を学ぶ。アナクサゴラスへも師事するが、彼の学説が「太陽神アポロンへの不敬」とされ、政治的迫害を受けたのを機に、悲劇作家に転身する。その作風は革新的であり、伝統的な悲劇の世界へ知性と日常性を導入した。作品様式面では「機械仕掛けの神(デウス・エクス・マキナ)」という劇作技法を多用したことが特徴的である。紀元前408年、マケドニア王アルケラオスに招かれ、都(ペラ)へ赴く。紀元前406年、マケドニアで客死。

劇壇のライバル・ソポクレスは計報に接し、丁度競演会の予備行事の場にいたが、喪服に着替えて弔意を表したという。

その容貌については「そばかす、濃いあごひげ」との短評あり。作品は三大悲劇詩人の中で最も多い19編が残存している。

主な作品：『メディア』『ヒッポリュトス』『エレクトラ』『タウリスのイビゲネイア』『ヘレネ』『オレステス』『バッコス教の信女たち』等

(機械仕掛けの神)といいます——アポロン神の裁定に従わず、自らの途を行こうとする若者オレステスを描こうとしています。オレステスは復讐の大義は理解できても、それが自分の母親殺したことには、改めて疑惑を覚えざるを得ません。しかもアポロン神は父の復讐を一方的に煽るだけで、あとは知らぬ顔です。わたしたちはオレステスの疑惑と罪の意識に共感を覚えます。しかし共感すればするほど彼の新しい人生行路はいったいどうなるのか、思いを馳せざるを得ません。遠い未来のいつかに開かれる法廷で予定されているという無罪放免の判決も、當てにしようがありません。法的無罪イコール心中の悩みの解消、とはどうやらなりそうにないのです。それは神すらも手の出しあうがない人間オレステス自身の問題だからです。

さしあたり今日明日をどう生きるか、オレステスにとってはそれが問題です。いつの日いか予定されている無罪判決を待てない新しい世代は、自らの途を自らの力で切り開いてゆかねばなりません。本篇のオレステスは劇の最後でアポロン神が退場した後でも一人だけ、いや、ヘルミオネを同伴者にして新しい道を模索します。安穏な神話伝承の世界への回帰を拒否する身に残されているのは、ひょっとして「無頼派」の旗挙げか——それも選択肢の一つになります。21世紀のボニーとクライドがエーゲ海沿いの乾いた荒れ地に乗り出すのです。

改めて述べておきましょう。本篇には原作にない二つの「書き込み」があります。一つは劇の冒頭に登場するクリュタ

イメストラの亡靈とその口から洩れる夫殺しの真意です。それはすなわちオレステスの心中の悩みと裏返しかたちでつながるものですが、同時にまたそれはデウス・エクス・マキナ以後にオレステスが目指そうとする新しい生き方にも繋がります。

もう一つはそのデウス・エクス・マキナ以後、すなわちアポロン神退場後に示されるオレステスの新しい旅立ちへの決意表明です。彼はアポロン神の裁定には従いたくないと言っているのです。

デウス・エクス・マキナという劇作技法、あるいはそこに登場する神(本篇ではアポロン)は、劇を終わらせるることはできても、劇中で提起された問題の解決には無力です。本篇でいえば、母親殺しによってオレステスの心中に生じた新しい罪の意識です。オレステスはそれを生涯抱えて生きてゆかねばならないのです。クリュタイメストラは己の行動の根本に中年女性の生理が潜んでいたことを告白します。無垢な青年オレステスには未知な世界ですが、どうやらアポロン神の支配するのとは別の世界が今後始まりそうな予感がします。

いずれにせよ、事態は古い伝統的な力の正義の遣り取りをすでに超えた新しい地平へ移っていることを窺わせます。エウリピデスはアポロン神の裁定でもって劇を閉じましたが、わたしたちはアポロン神の退場後も席を立たず、オレステスの行方を追うことになります。この延長戦が意味あるかどうか、いや、皆様方のお気に召すかどうか、とくとご覧あれ。

清流劇場 2021年10月公演『弱虫オレステス』

10月 13日(水)18:30

14日(木)18:30

15日(金)14:00・18:30

16日(土)14:00 (終演後アフタートーク開催)

17日(日)14:00

※各回、開演15分前から田中孝弥によります「ヒフォアトーク」を実施。

会場／一心寺シアター倶楽

543-0062 大阪市天王寺区逢坂 2-6-13 B1F phone : 06-6774-4002
<http://isshinji.net/kura/index.html>

原作／エウリピデス

原作翻訳・補綴・ドラマトゥルク／丹下和彦

構成・演出／田中孝弥

出演／アンディ岸本 日永貴子 永津真奈 Aripe 木全晶子 浜本克弥 小骨座
木下聖浩 たちばなゆひ 趙清香 近藤輝一 黄色団 北野秀気

音楽・ピアノ演奏／仙波宏文

ヴァイオリン演奏／谷川千尋

舞台監督／大野亜希 舞台美術／内山勉 舞台美術アシスタント／新井真紀 照明／森和雄 照明オペ／木内ひとみ 音響／ふじわらゆうこ

衣装／山口夏希 大道具／(南)アーティスティックポイント 小道具／濱口美也子 ヘアメイク／島田裕子 振付／東出ますよ

写真／古都栄二 (南)テス・大阪 ビデオ／板倉善之 宣伝動画／三木梓沙 web・制作協力／飯村登史佳 宣伝美術／黒田武志(sandscape)

特別協力／曾木亜古弥 福永樹 演出助手／K-Fluss

協力／イズム (南)ライターズ・カンパニー NIKITA 吉本興業株式会社 バンタンデザイン研究所大阪校 アンサンブル・サビーナ
高口真吾 堀内立誓 柏木貴久子 森池日佐子 佐々木治己 川口典成

提携／一心寺シアター倶楽 制作／永朋 企画／一般社団法人清流劇場

アフタートーク出演者／パネラー：丹下和彦 (清流劇場ドラマトゥルク・大阪市立大学名誉教授・古代ギリシア文学者)

藤原治基 (演劇プロデューサー・おうさか学生演劇祭主宰)

司会：田中孝弥 (清流劇場代表)

お問い合わせ ● 清流劇場 e-mail : info@seiryu-theater.jp

<https://seiryu-theater.jp>

清流劇場ウェブサイトでは、過去の作品のダイジェスト映像や舞台写真を公開しております。是非、ご覧ください。

清流劇場は公演サポーター(個人様からの寄付)を募集しています。コースと特典リストは清流劇場ウェブサイトにて、ご案内しています。ご支援をよろしくお願いします。

ON LINE
オンライン配信

『弱虫オレステス』 ●配信期間／2021年10月24日(日)～10月31日(日)

●視聴料金／2,000円(公演パンフレット電子版付き) ※視聴チケットの入手方法等、詳細は劇団ウェブサイトをご覧ください。